

Title	平安時代に於ける白居易受容の史的考察(上)
Sub Title	A historical study on the reception of Po Chu-i's works in the Heian period
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.18(408)- 52(442)
JaLC DOI	
Abstract	<p>In the Tang Period when the cultural progress was remarkable there appeared very many distinguished literary men, among whom we must first point to Po Chu-i as one of the greatest in due consideration of his influence on Japan in the Heian Period. The fact may be attributed to various causes that his reputation in Japan towers absolutely high above the others, though our estimation of his works is not always the same as that in China. On this fact opinions have been given so far, chiefly from the literary point of view and from the character of his plain poems. Many of these literary men were at the same time scholars and most of them were governmental officials by profession, though in those days it was almost the same situation both in China and in Japan. In this treatise the writer is going to study Po Chu-i from the standpoint based on the fact that he was a governmental official, and examine, therefore, the popular favour of his poems in this country also from that point of view. Now, the writer divides the class, receptive of new culture, in this country into two parts, the upper and middle class-they were all aristocrats and the writer points out the fact that the former tried to receive his poems mainly as their literary ornament while the latter did more than that, sympathizing with the way he led his life, especially with his feelings of joys and sorrows as an official, moreover they received him as a guide in life. Under the government of the days, however, the literary men of the middle class were standing on the brink of downfall. Po Chu-i, their guide, was, on the other hand, an official highly advanced in his position. For that reason there could be found the tendency for them to look upon him even as an ideal figure. Though fairly sharp political poems can be seen in Po Chu-i's early works, the impetuous charges of them gradually disappeared in the course of time, and he was, to some extent, contented with his life. Accordingly the spirit through his whole life was fundamentally a sensible optimism. In this very point can be found the reason why his poems are regarded as pregnant with something tranquil. The decadent mood in the aristocratic circles of this country avoided anything magnificent or anything sharply stimulative. It is here that we find out the secret of Po Chu-i's popularity among the nobles in Japan. So, those who were not satisfied with the existing state of affairs and those who wished to go forward beyond the sphere of this corrupted aristocracy had to get ahead of Po Chu-i, encouraged by something else, although greatly influenced by Po Chu-i.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平安時代に於ける白居易受容の史的考察(上)

太 田 次 男

一、はしがき

二、(1)官人としての白居易

(2)その思想

三、(1)白居易受容の基本的條件

(2)中級文人との關聯

四、白居易と平安朝淨土教(以下次號)

一

白居易の文學が平安朝文人達に與えた影響については、これまでに既に幾多の優れた研究がなされてきた。⁽¹⁾ただそれらは、いわば狭い意味に於ける文學に限られていることが多く、その社會的背景や、平安貴族を中心とするその受容層の階層的な分析などについては、觸れられることが意外にすくないようである。

いうまでもなく、中國の文人達はその大部分が同時に學者でもあったが、いわばその本業ともいうべきものは、飽く迄も官僚としての職務であつて、決してそれ程自由な身ではなかった。遂にその制約の煩しさに堪えられない者

は、或いは朝を去つて隱逸閑居することもあつたが、それとても餘程恵まれた條件の下にない限り、完全に獨立した存在になるには、尚多くの困難を伴っていた。

いま白居易の生涯を顧みるとき、たとえどれ程清澄な境地や、出世間的な状態が詩的に表現されているにしても、現實生活としては、矢張終世官僚制から自由になることはできなかったのである。勿論、白居易文學は決してこの角度からのみ、説き盡せるものではない。ただ、彼の文學がわが國に受け容れられるに際して、當然のことながら、その主導的役割を果たした者が、同じく文人、學者、官僚の三者を兼ねた中級の文人貴族層であり、特にその官僚的心情の共通性が、白居易文學盛行の一端を擔っていると思われるので、彼我の政治、社會、文化的環境を考慮に入れつつ、わが國に於ける、白居易文學受容の實相を明にしたいと思うのである。

更にこの中で問題の焦點を絞り、藤原時代に於ける淨土思想の展開への、白居易による影響についても觸れてみたい。攝關政治下に於て、攝關家の繁榮とは逆に、私領を領有しない多くの中下級の官人達は、國家財政の行き詰りと共に次第に困窮の一途を辿り、その没落過程に於て、慶滋保胤ら一部文人の中には、現實社會の批判を通して、淨土教へ向う者が輩出し、特にその結社の一つである勸學會の運動が、淨土教の展開に少なからぬ影響を與えたとの説が井上光貞氏などによって出されるようになった。(『日本淨土教成立史の研究』なるほど彼等中級貴族たる文人達は、藤原氏の獨占支配體制の下にあって、相對的には最も鋭い社會批判者であるといえるかも知れないが、その批判の實内容が果してそれ程明確なものであるのか、また批判そのものが眞に成立しうる社會環境が尚存立していたかに、かなり問題があろう。こういう背景を考慮に入れつつ、勸學會や淨土教の發展についても究明してみよう。

註 (1) 水野平次『白樂天と日本文學』 金子彦二郎『平安時代と白氏文集』(二冊) などがある。

二

(1)

先ず、受容する側としての立場や環境を分析する前に、白居易その人について若干知っておく必要もあろうが、いまは主題にそつて、官人白居易の行實のみに止めておきたい。

中國に於ては、唐初の争亂によつて舊貴族は多く没落し、それに代つて、從來二三流に過ぎなかつた豪族が、王室との妥協によつて次第に勢力を伸張してきたが、安祿山の亂以後、再びその社會階層には大きな變化がみられ、實力を伴う新しい階層の進出をも比較的容易にした。従つて、白居易の如く、最初から中央とのつながりを持たない地方出身の科擧合格者達も、力倆次第では、上層に昇ることも充分可能となつたのである。

白居易は元來決して恵まれた環境から出たわけではなかつたが、絶えざる勤勉と努力によつて、周圍の事態は徐々に好轉するようになった。彼は若い頃を振り返つて「頭を掉^{ふる}ひて俊造と稱せられ、足を翹^あげて公卿を取らんとす⁽¹⁾」や「功名は宿昔人多く許しぬ⁽²⁾」とあるように、若い頃からかなり自信を持つと共に、立身出世についても自他共に許していたのである。刻苦勉勵の結果、その後は比較的順調に官僚昇進のコースを辿り、卅七歳で左拾遺に任ぜられ、いわゆる「諫諍員」となつて、當時の政治、社會問題に直面することになった。

これから四十四歳のとき、江州に司馬として左遷されるまで、職務の上で多くの起伏もあつたが、「拙直にして時に合⁽³⁾わす⁽³⁾」とか「我鄙介の性有り、剛を好んで柔を好⁽⁴⁾まず⁽⁴⁾」と述懐しているように、官人として黨派に左右されないこ

との難しさを痛感したのであるが、政治問題に關心をもった頃の所産として、諷諭詩「新樂府」五十篇や、同じく「秦中吟」十首などが作られた。その動機については自から「但民の病痛を傷んで、時の忌諱を識らず。遂に秦中吟を作り、一吟一事を悲⁽⁵⁾む」といつているが、これが貴族達に喜ばれなかったのは周知の通りである。ただその職務上の經驗をもとにして、社會的問題やそこに内在する病弊などを詩の對象として取上げて、しかもこれを公表することができたところに、中國に於ける社會批判としての詩の傳統と、當時の貴族社會の幅廣さを實感させるであろう。

然しながら、この種の批判は、必ずしも在野の自由な精神による發言ではなく、究極的には、官僚として専制維持のための努力であることが多く、彼にしても「惟生民の病を歌ひて、天子の知を得んことを願ふ⁽⁶⁾」と述べているのは銘記すべきであろう。同じく「新樂府」の序に「總て之を言へば、君の爲臣の爲物の爲事の爲にして作る、文の爲にして作らざるなり⁽⁷⁾」と述べているのにも、濃厚な官人意識を汲取ることはできようし、政治詩に於て示されている直言の背後に、尊大さ、功名心などと共に、誇大な悲愴的心理の影をも見逃すことはできないのである。

然し、官人の立場は安定してはいない。支持者の悲運はそのままが身邊に影響を及ぼすのであり、四十三歳、悟真寺に遊び幽邃な山氣に觸れては「我は本山中の人、誤って時網に牽かる⁽⁸⁾」と既に閑居を慕ってはいるが、更に「四十にして心動かず、吾今それちかし⁽⁹⁾」という揚言に接すると、彼はよくこのようなポーズをとるのであるが、次第に官界に對する自信と足場とを喪失してゆく過程に於ける、白居易特有の表現が既に現われ始めるのである。その詩人的誠實さを疑うわけではないが、隱遁というような言葉は、このような不安定な環境に置かれた時のいわば常套語であり、その底には寧ろ逆に、官に執着している姿をはっきりと覗うことができるのである。儒、佛兩道が奇妙な混淆を示すのも、このような内面的危機に際してのことが多いのである。

四十四歳の初冬、分を超えた政治活動が禍して、江州司馬に左遷されることになった。そして五年後、再び中央に復歸するまでに、途中忠州刺史に轉任することなどもあったが、「何ぞ此南遷の客、五年にして獨未だ還らざる⁽¹⁰⁾」といっているのは、その間の實感であろう。司馬は閑職であり、安心の境地を求めて、任地に近い佛教の中心盧山にも足繁しく往來している。然しながら、「兩眼日に將に闇からんとし、四肢漸く衰瘦す⁽¹¹⁾」という焦慮と、未だ消えやらぬ「富貴は本望みに非ず、功名は須らく時を待つべし⁽¹²⁾」という功名心の交錯するところに、苦惱はいよいよ深まるばかりであつた。時として、明準上人に對して「借問す空門の子、何の法か修行し易く、我をして心を忘れ得しめ、煩惱をして生ぜしめざる⁽¹³⁾」と問わざるを得なかつた心境も、さこそと思われるのである。

時と共に、漸く佛門に心を託して一應平靜にはなるが、それもウェーリーの如く、「同時に隱遁者であり、役人であることを望む者にとつて、これ以上の職はない⁽¹⁴⁾」という意味での、いわば無理な諦念による自得であつたと思われ、従つてその間、中央への召還を請願しようとしたことも屢々であつた。それ故時として、「若し坐禪して妄想を鎖せずんば、即ち須らく吟酔して狂歌を放にすべし、然らずんば秋月春風の夜、爭でか間に往事を思ふを那何せん⁽¹⁵⁾」という憤懣の情は抑制し難かつたに違いない。つまり本質的には依然として流轉の中にあるのであつて「生去死來却て是れ幻、幻人の哀樂何の情にか繋る⁽¹⁶⁾」というような、空々しい、體驗に裏づけられざる言も吐かれるのである。宗教については、この間、禪、道教などの遍歴がみられるが、心的動搖の影は消えてはいない。従つて、そこに生れる宗教詩は極めて底が淺く、概念的な饒舌に過ぎないものがしきりに作られているのである。

元和十三年十二月、忠州刺史に除せられ、翌二月同地に到つた。時に四十八歳である。途中長江を遡る舟中で弟行簡に五十韻を示しているが、それは年少者に對する處世訓であると共に、自らの新生への第一聲ということもできよ

う。その一節に「險路應に須らく避くべし、迷塗共に爭ふことを莫れ。此心に止足を知る、何物か經營を要せん。玉は泥中に向ひて潔く、松は雪後を経て貞し。朝市に隠るるを妨ぐる無し、必ずしも褻瀛くわんえいを謝せず。但前非を悟るに在り、後患に嬰かかること無きを期す。知ること多きは景福に非ず、語ること少きは元享。晦は即ち身を全くするの藥、明は性を伐るの兵たり。昏昏として世俗に隨ひ、蠢蠢として黎甿を學ぶ。鳥は能く言ふを以て稱せられ、龜は夢に入るに縁りて烹らる。之を知る一に何ぞ晚き、猶餘生を保つに足る(17)」とあるように、明哲保身の態度を明にしている。これは明かに敗北の言葉であり、よくいえば轉向の詩であつて、世俗との妥協を自ら認めたものに外ならない。しかもそれは決して複雑怪奇な官界を去つて閑居を表明したものではなく、更に世俗の中に生きようとする、生えの執着の表現といつてもよいであらう。それ故、刺史の官服に關する詩がこの間に意外に多いのを見ても、官界生活への關心の程度がわかるのである。曾ての諷諭詩が以後影をひそめるのはいうまでもあるまい。

歸京以後、武宗の會昌六年、七十五歳で死去するまでには、自らの希望もあつて、抗州刺史、蘇州刺史などの地方官に任ぜられたこともあつたが、前半生に見られた程の波瀾もなく、殊に太和二年、五十七歳で刑部侍郎を授けられたからは、生活も比較的安定したといえる。ただ内面生活は依然として未だ安心の境地に至つたとはいえず、據り所を得ようとする努力は依然として續けられた。然しそれは曾てのように、何か差迫つた重苦しいものではなく、餘生を如何に快適に送ろうとする意味での精進であつた。「丈夫一生に二志あり、兼濟獨善得て并せ難し、生民の病を救療する能はずんば、即ち須らく先づ塵土の纓を濯ふべし(18)」とあるように、政治的に華々しい活動を斷念した白居易は、専ら内部の充實を計り、餘生を平靜に送ろうと計つたのである。

彼にとつて、國家の仕事は最早積極的な意義を喪失した。官人生活に若し意義があるとすれば、それは安穩な生活を

送りうる爲の、經濟的保證を國家から得ようとするのであった。⁽¹⁹⁾「合に丘園に返らん」ことを期しつつも、「衣食に繋⁽²⁰⁾る」ことを嘆き、一方では「唯慙づ老病朝服を披ることを、飢寒を慮つて俸錢を計ること勿れ⁽²¹⁾」と自戒しているけれども、「官を抛ち去らんと欲して尚遲疑す⁽²²⁾」る現實をどうすることも出来なかった。曾ては儒教的倫理感に基ずく社會批判をし、又民衆のエネルギーを吸収して、平易な詩を創造し得た白居易ではあったが、いまや彼の理想は空しく挫折し、出世間の意圖はあつても、生えの執着を斷ち切ることはできなかった。

白居易にとって、隱居するということ自體が必ずしも第一義的なものではなく、それはただ世俗の生活の歸結に過ぎず、従つてその後半生をみても、必ずしも政治的角逐の圈外に身を置こうと計るでもなく、また時として、その渦中から身を避ける意味から、隱遁者の言辭を弄してわが身の安全を計ろうとすることもあつた。彼は多くの隱者の詩作をしているにも拘らず、その考え方は寧ろ極めて常識的であつた。彼にとって、この現世は否定すべく、餘りにも多彩な糸で織りなされていたのである。

註 (1) 「江州赴忠州至江陵以來舟中示舍弟五十韻」(卷四、七五八頁)

尚、白居易の詩については、特別の斷りなき限り、總て『續國譯漢文大成』の佐久節氏譯に従つた。従つて、ここに示される卷數、頁數もそれに據っている。

- (2) 「自題」(卷二、六七七頁) (3) 「遊悟眞寺詩」(卷一、五三七頁) (4) 「折劍頭」(卷一、五一頁) (5) 「傷唐衢二首」(卷一、七一頁) (6) 「寄唐生」(卷一、六六頁) (7) 「新樂府序」(卷一、二三五頁) (8) 「遊悟眞寺詩」(卷一、五三六頁) (9) 「隱几」(卷一、四八四頁) (10) 「歲晚」(卷二、一四二頁) (11) 「不二門」(卷二、一一八頁)
- (12) 「東澗種柳」(卷二、一三三頁) (13) 「客路感秋寄明準上人」(卷一、七三九頁) (14) 「白樂天」(花房英樹譯)(二七三頁) (15) 「強酒」(卷二、五四九頁) (16) 「放言」(卷二、五四六頁) (17) 「江州赴忠州至江陵以來舟中示舍弟五十韻」(卷二、七五九頁) (18) 「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌」(卷三、二六五頁) (19) 「晚歲」(卷二、九八七頁)
- (21) 「早朝思退居」(卷二、八五七頁) (22) 「蕭相公宅遇白遠禪師有感而贈」(卷二、九二〇頁)

(2)

ここで、白居易の後半生の思想的遍歴について、もう少し觸れてみよう。

彼は幾分辯解と自戒を交えた口調をもつて「中隱」という言葉を使用している。同じ題名の詩に於て「大隱は朝市に住み、小隱は丘樊^{はん}に入る。丘樊は太だ冷落、朝市は太だ囂誼。如かず中隱と作り、隠れて留司の官に在るには。出づるに似て復處るに似たり、忙しきに非ず亦間なるに非ず。心と力とを勞せず、又飢と寒とを免る。歳を終るまで公事なく、月に隨ひて俸錢有り。君若し登臨を好まば、城南に秋山有り。君若し遊蕩を愛せば、城東に春園有り。君若し一醉を欲せば、時に出でて賓筵に赴け。洛中に君子多し、以て歡言を恣にす可し。君若し高臥を欲せば、但自ら深く關を掩へ。亦車馬の客、造次門前に到る無し。人生れて一生に處る。其道兩ながら全くし難し。賤しくしては即ち凍餒に苦しみ、貴くしては則ち憂患多し。唯此中隱の士、身を致すこと吉にして且安し。窮通と豐約と、正に四者の間に在り⁽²³⁾」と述べているが、これは彼が太子賓客の閑職を得て、新たに始まった洛陽での生活を敍したものであり、強いて己れに納得させようとする處もなくはないが、諦めの中にやはり現實を強く肯定しようとする點が明に見えるのである。特に「丘樊は太だ冷落」という一句や、「亦間を愛する人有り、又窮餓の爲に逼らる⁽²⁴⁾」にも示されるように、林丘の生活や窮餓の狀態は到底白居易の堪えうるものではない。大隱と小隱との間に中隱なる概念を作り出したのは、その内に、諦念による、止むを得ざるものがあるのを考えに入れても、その常識的曖昧さによる不徹底を問題とせざるを得ないのである。

更に、否定的契機を含まない彼の考え方は、當然、老、莊、儒（顏回）に對する疑問となつて示される。「老は心の亂れざるを誨へ、莊は形の太だ勞するを戒む。生命既に能く保たば、死籍も亦逃る可し。嘉肴と旨酒とは、信に是

れ腸を腐する膏なり。 艶聲と麗色とは、眞に性を伐る刀たり。 補養は功を積むに在り、裘の衆毛を集むるが如

し。 將に千里を致さんと欲せば、一毫を差ふを得ず。 顔回は何爲る者ぞ、簞瓢纔に自ら給す。 肥醜口に到らず、

年は三十に登らず。 張蒼は何爲る者ぞ、染愛浩として際無し。 妾媵後房に填ち、竟に壽百餘歳。 蒼の壽きこ

と何の徳か有る、回の夭すること何の辜か有る。 誰か謂ふ聖體を具ふと、肥瓠の軀に如かず。 遂に世俗の心をし

て、多くの仙道の書を疑はしむ。⁽²⁵⁾」の句は、一應仙道に對する疑念には違ひないが、その底には、いかに己れの肉

體の保全に切實であつたかが、はつきりと示されているではないか。そこには、現實主義者張蒼に對する積極的な批

判は全然みられないし、寧ろそれどころか、ある程度これを肯定し、その生命力を讚美すらしかねない程である。自

らも、「薇を食ひ水を飲みて自ら苦辛する能はず⁽²⁶⁾」といっているように、現實生活を無視した高尚な生活などは、彼に

は到底堪えうるところではなかつたに違ひない。

斷ちきることのできない現實的欲求の調和的解決を、一時は仙道に求めようとして、遂に求め得なかつた爲か、彼はやがて禪にも近づいていった。「前後際斷の處、一念不生の時⁽²⁷⁾」という表現にも示されるように、禪は確かに詩人にとっては魅力的な思想であろう。白居易は一個の人間として禪に向つてゐるばかりではなく、確かにそこには文學が介入してゐたのである。琴と酒とは彼が一時も離すことのできないものであつた。それ故禪と酒とが並べて詠われるのも或は自然のことかも知れないが、ただ「第一に禪に若くは莫く、第二に醉に如くは無し。 禪は能く人我を泯ぼし、醉は榮悴を忘る可し。 儒教は禮法を重んじ、道家は神氣を養ふ。 禮を重んずれば滋々彰るるに足り、神を養へば避忌多し。 禪定を學ぶに如かず、中に甚深の味有り。 曠廓として了に空しきが如き、澄凝して睡るに勝れり。 黙黙の念を屏除し、悠悠の思を鎖盡す。 春は春を傷む心無く、秋は秋に感ずる涙無し。 坐に眞諦の樂を成

し、空王の賜を受くるが如し。既に塵勞を脱するを得、兼ねて應に慙愧を離るべし。禪を除けば其次は醉なり、此說謂れ無きに非ず。一酌機即ち忘れ、三盃性咸く遂ぐ。：須らく百杯の沃ぐを憑むべし、千金の費を惜む莫れ。便ち罩中の魚の、脱れ飛びて兩翅を生ずるに似たり。君に勸む老大と雖も、酒に逢ひては廻避する莫れ。然らざれば即ち禪を學べ、兩途同じく一致⁽²⁸⁾といったが、この禪と酒の功德を説明的に述べ得たところに、白居易の信仰的淺薄さを認めざるを得ないのである。つまり、禪をかくも安易に解説することを試み、それによる解説の境地を、恰も物を掌上にのぼせるかのように容易に示しているからである。そこに示されているのは、禪的實踐の實内容とは似ても似つかないものであり、ただその氣分のみがまことしやかに述べられているに過ぎない。

白居易は更に禪以外にも、當時のあらゆる思想に接し、一應これに夫々の反應を示しつつ、これを受容しようとする努力は惜まなかつたけれども、そこには、曾てあらゆる儒教の經典に通曉しなければならなかつた、科擧への受験に應ずる爲の異常なる努力の仕方と、共通した態度を感じしめるのである。それは一見、確に眞摯な求道態度ではあるが、現實世界の魅力圈内に彷徨する者にとって、遂にそのどれにも眞に悟入することができずに、次々と新しい思想に關心を示しつつ、しかも永く流轉せざるを得なかつたのである。従つて、時として相反する思想がその内心に於て同時に共存するということも、決して稀ではなかつたが、思想への接近の仕方が遂に概念的理理解に止っているならば、それも充分にあり得べきことであつて、特に取立てて論ずる程のこともないのである。

生の支えになるものが、全身を以て徹底的に追求されないとくころでは、單に多くの思想の羅列がみられ、それら相互間の區別はさほど必要ではない。事實彼に見られる禪と晩年に於ける淨土思想との關係など、両者の相違も頗る曖昧で、尚不明の點も多く存するのである。そして「白衣の居士紫芝の仙、半ば酔ひて行歌し半ば坐禪す。今日の維摩

は兼ねて酒を飲み、當時の綺季は錢を請はず⁽²⁹⁾」というように、或る時は空の思想に、また或るときは法華經に基ずいた壯大な現實肯定の大乘思想などに、いわば酔うような態度が示されるのである。

晩年の詩に「歡娛」という言葉が屢々使用され、例えば「應に藏れ避くる處なかるべし、只且く歡娛有るのみ」⁽³⁰⁾のように示されているが、ここに白居易の特に後半生の態度が最も端的に表現されているとみてよいであろう。そうして、終局的には、小守郁子氏が引用された朱子の言葉に「樂天はしきりに自分の清高なくらしをうたっているが、その實は官職を愛しているのである。詩中、富貴にふれたところでは、だらだらよだれのたれるようないかにもものほしそうな表現である」とあるように、白居易は遂に最後まで官人としての人生を捨て去ることが出来なかつたのである。古くは蘇東波が「白俗」と稱してこれを退けたことや、近くは吉川幸次郎博士が「饒舌」⁽³²⁾と評されたのも單に詩に對する評語としてのみではなく、その生き方に對しても、いずれも首肯されるように思えるのである。

註 (23) 「中隱」(卷三、一九六頁)

(24) 「詠懷」(卷三、三〇八頁)

(25) 「寄盧少尹」(卷三、二八四頁)

(26) 「雪中晏起。偶

詠所懷。…」(卷三、三四四頁)

(27) 「神照禪師同宿」(卷三、二七六頁)

(28) 「和知非」(卷三、一六九頁)

(29) 「自詠」(卷四、二〇六頁)

(30) 「七年元日對酒五首」(卷四、一七三頁)

(31) 小守郁子「白樂天の限界―その否定精神

の欠如―」(『名古屋大學文學部十周年記念論文集』)

(32) 『白居易』下(中國詩人選集13) 跋文

三

(1)

白居易文學の受容を述べるに當つて、先ず受容の一般的條件として、——これは既によく知られていることではあるが、整理と社會批判成立の可否検討のために述べる——當時の官人の在り方や、學問、文化の傾向などに觸れ、

そういう條件の下に、白居易文學のどのような面が、いかように受容されてゆくかを明にしたい。

前章に於て、白居易は地方出身者ではあったが、科擧の制度を足場として、次第に昇進したことを述べた。勿論唐時代に於ても、舊貴族の勢力は未だ抜き難い存在であったが、それでも科擧出身の新興官人進出の餘地は残されていた。統一國家として中央は強大であったが、元來地方に殖民的に發展することが中國々家の在り方の基本であつてみれば、北方を中心にして、地方の存在が史的に決して無視し得ないのは當然であり、わが國などの場合と違つて、地方豪族の規模も大きく、それぞれ優に獨立しうる存在であつた。科擧の制度については、その原則的考え方はかなり古くから在つたが、要するに專制國家としてそれにふさわしい統一國家を形成しようとすれば、これまでの舊貴族から一段優位に立つことが必要になり、その爲の支援者として新しい層に人材を求めねばならなかつた。そうしてこの要請に應じうる讀書人階級は、中央、地方をも含めてわが國よりは遙かに多く、また中央のみに偏することもなかつた。これに引換え、わが國に於ては、政治、文化のあらゆる面で中央、地方とは非常な距りがあり、一切の力は中央に集中していた。産業の發達も遅れ、地方豪族の規模も貧弱であり、地方は常に窮乏狀態に置かれていた。従つて、新官人の出身地として、地方が充分の力を藏しているとは到底いえることではなかつた。大學の業を終え、中央の官吏になり得る者は、全國的にみれば正しく一握の砂にも及ばない程であり、然もその殆んどが、中央にいる人の子弟達に限られていた。従つて政治的にも文化的にも、極端な中央偏重に陥ることも止むをえないことであつた。

更に、政治、社会的にみて、わが國では古代國家の崩壊まで、上層内の争亂と、これによる勢力の交替は屢々みられたけれども、異層間の争はなく、特に下層の革新勢力なるものが存在せず、従つて社會變革の危險すら曾て存在しなかつた。このようにして、氏族制は幾分の變形を受けながらも永續し、遂に藤原氏の出現を可能ならしめた。大學

出身の官人の勢力の如きは、後楯がない限り、二、三の例外を除けばいずれも微弱であつて、上流貴族に對抗することなどは及びもつかないことであり、若し彼等に可能なことがありとすれば、上流に追隨することのみであつた。

このような社會に成立する文化は、當然のことながら、生きた實體としての地方には殆んど地盤をもたず、中央のごく少數者によつて作り上げられたものであり、それは消費的性格の強い、狭い階級的視野に立つものとなり、また根柢の極めて浅いものたらざるを得なかつた。地方はごく一部を除いては、文化的には不毛の地と見做され、中央の人は徒に地方を輕視し、例えば一流の詩人が國司となつて地方に下つたにしても、その地を詩の對象に取上げて、都に見られない風光を歌い上げたり、或は地方農民の辛苦をありのままに表現するようなことも殆んどなく、皆異口同音に都を懷しみ、京官に復歸できる日をひたすら待ちわびる有様であつた。更に後の遣唐使中止と相俟つて、都ではみられない異質のものが文化形成に刺戟を與えることも殆んどなく、中央の文化が質的に強化されるような要因は全くなかつた。この點——これは餘り顧みられないが——白氏に於ける地方や庶民の影響と全く異つてゐる。

當面の問題として、外國文化の受容に最も關係の深い大學制度や、そこでの學問の傾向をみると、これまでにみられた傾向はここでも亦そのまゝみることができ、根柢のない外形的模倣が一層際立つて示されるのである。

その教科内容やそれに伴う教科書が中國のものを主としているのはまだしも、その註釋書もすべて固定したものであり、いわゆる記誦の學が教授される。そこに學ぶ者は中國の學問の斷片的知識は得られようが、内容の批判的研究は求むべくもなく、中國哲學の體系的把握の如きは全く無縁のことであつた。當時の學者、學生には、獨自の立場から事物を體系的に把握するという態度は殆んどみられない。然も、中國の政治道德をその主たる教科内容とする明經道は、社會的要求の少くなるにつれて次第に不振となり、文學、史學を内容とする紀傳道が社會に於ける文學活動の

隆盛に伴って、これに代り、文章博士の地位が次第に優位に立つことは周知の通りである。

紀傳道の優勢はいうまでもなく、當時の社會的要請に基ずくものであり、それは即ち貴族社會に於ける文學的需要の増大の反映である。その最も大きな役割はいうまでもなく、貴族社會に於ける裝飾としてである。曾て『文選』がそうであつたように、『白氏文集』はいわば文學辭典として、漢詩、和歌に典據を與えるという役割を果していたのであるが、それは勿論體驗としての文學ではなく、單なる資料に過ぎない場合が多かつた。菅原道眞に「書齋記」という一文がある。これはそれ自體としては、道眞の眞摯な學者的一面がよく現われているものであるが、又一方からすれば、その書齋に尠大な語彙のカードを蔵していることなどに、およそ文章を書く人の、いわば樂屋裏を見せつけられているようで、甚だ興味深いものである。

更に外國文化、わけでも文學の移植に際して問題となるのは、原文や原詩に如何に本質的に肉迫するかということであろう。神田秀夫氏は比較文學の立場から、白居易文學のわが國への移植について述べられたが、その中で「長恨歌」のわが貴族社會に於ける壓倒的盛行に觸れ、元來中國に於て、この長恨歌は口から耳へ、耳から口へと傳わるような、口語的で極めて大衆性のある作品であり、その言葉や詩體についても、胡適の研究などをもとにして、それが古くからの民間敘事詩的詩體であると指摘されている。白居易自身、自分の作品が中國大衆の隅々にまで熱狂的に歡迎されたことを、寧ろ喜悅しているのは周知の通りであるが、わが國の貴族社會ではそれが文語として扱われ、しかも、背後の民衆の存在は全く無視されて、高尚な貴族文學として受容されている所に一つの問題點があるう。

白居易文學移植の時期については種々異説があるが、既に彼の生前から、わが國ではその作品が知られていたのは確かであつて、勿論、それは未だ遣唐使廢止以前のことであつた。遣唐使が引續き派遣され、それ以外にも彼我兩國

民の私的な往來はあつたにしても、日中兩國の距離は地理的に計量される以上に遠い距りをもっていた。先進的文化圏とこのように距離をもつような場合、その結果は種々の形をとって現われてくるのであるが、その根本的なものが、ここに擧げた言語の點であり、或はこれは一種宿命的なことといつてもよいであろう。

律令制下の大學に於ても、中國の言葉の習得については一應陣容も整つていたけれども、やはり生きた音や音調などは仲々學びにくい。ところが文學、わけても詩の場合などでは、音調を無視しては眞の受容はありえない筈である。大學に音博士の定員はあつても、その任務は音調などを通して、文學の内部にまで迫る程高級のものではなく、殆んど中國音の發音矯正や、單なる會話程度のもの教授に過ぎず、その地位も極めて低いものであつた。

従つて、平安朝の文人達は、少數の言語的天才を除いて、口語と文語の區別も充分つき兼ねない上に、更に本來極めて音樂的な中國語に於ける音調なども、聞きわけける耳を充分に持ち合せないままに、平面的ないわば啞の言語をもつて、白居易文學を懸命に記憶し、摸倣しようと努力したわけである。

その結果起る最も危険なことは、生きた文學體驗を殺し、斷片的、或は概念的把握に止まらしめることが多く、或は單なる理解の段階以上に、文學の内部にまで迫ることを不可能ならしめることである。しかも白居易のように長命で、かつ中國に於ても一般に歡迎された詩人の場合には、たまたま遣唐使などとして中國に往つた者にとつては、先進國に對する無批判の憧れもあつて、その時に流行したり評判の高い作を、手柄顔に持ち歸ることが必ずやあつたに違いない。しかも、時代を異にして移し植えられたその一つ一つが、中國での評判に包まれて、相互に何の脈絡もなしに移入されることも少なくはない。生きた斷片は、ただそれだけで立派に生命を有し、全體の一部ではあるが、或る意味ではそのまま全體を顯現することもありうるのであるが、主として言語的制約などもあつて、單なる斷片に止

まるものは、どれ程集積されても、依然として單なる斷片に過ぎないのである。白居易文學が解體され、その小片ともいふべき小句が大切に扱われ、摸倣されてゆく根本には、このようなことがあることも知らねばなるまい。

このような問題を蔵しながらも、白氏の文學をはじめとして、文學は隆盛を極めるようになった。然しこの事は一面からみれば、政治理想の消滅をきたして、現實社會に於ける危機との對決を忌避させる結果にもなり、およそ理性的行動を全面的に鈍らせてゆくのである。大學は官吏養成機關としての機能を実際上停止して、没落に瀕するに至り、文章博士をはじめ大學の教官は、大學の衰退とは逆に、次第に普及する上流貴族やその子弟の爲に設けられた家庭教育の場に、教師として招聘され、その勢力下に吸収されるようになった。それは時として貴族——特に攝關家の家司になることでもあり、多くの學者は、完全に攝關家やその他の權門に従屬することになった。しかもそのことは、そのまま自己の榮達の途に直結していたのである。學問は政治の爲に奉仕してこそ存在價值があると見做され、何人もこれを怪しまなかつた。多くの學者は權門に良心を賣り渡し、彼等のためにはどのようなことをも敢てするという⁽⁴⁾ことも、決してすくなくはなかつた。それは學問の名門、然らざるものをも問わない一般的傾向であつた。

元來わが國には古代ギリシアのように、純粹に眞理を探究するような地盤は形成されなかつた。これは古代國家に於て、社會的變動が少なく、従つて專制的勢力を自由に批判しうる勢力の階層的形がみられなかつた爲であろうが、そういう反對勢力の發達しない社會では、學問や眞理が政治と切離されて純粹に論争されることは不可能に近いのである。一見どれ程純粹らしくみえても、その背後には醜惡な勢力争いが介入していることを見逃してはなるまい。學問が政治によつて左右されれば、そこにやがて學問も表面化し、それら相互の間に勢力争いや、排他的な運動が横行するのであつて、實は菅原道眞なども、その方の代表的人物と目されていたのである。⁽⁵⁾藤原時平による太宰府

への左遷なども、確に藤原獨占政權による犠牲には違いないが、學界、政界にわたる廣範圍の勢力扶植の實情を知れば、あのような運命を辿ることも、一面からすれば止むを得ないものともいえるのであり、三善清行の道眞への書簡⁽⁶⁾もそれを物語っているともいえよう。普通、道眞の眞實に對する道德的勇氣を示すに足ることとして、阿衡の難が引合いに出されるが、そこにも學閥上の抗争が介入していたことは、既に秋山虔氏によつて明にされている。⁽⁷⁾これは推測に過ぎないのであるが、道眞による遣唐使廢止の奏請のごときも、表面的にいわれる尤もらしい理由以外に、何か私的な事情がひそんでいたのではないか、という疑念を挟む餘地がありはすまいか。これに關聯して、平安時代の批評文として代表的なものの一つに教えられている三善清行の「意見封事」なども、その第一條に於て、神主、僧侶の墮落を先ず取上げていることなどによつて暗示されるように、⁽⁸⁾その重點の置き方や、批評の對象などについても、かなり私的な色彩が強いように思えるのである。

こうみてくると、官人、文人、學者の三者を一應併せもつ彼等の立場は如何にも不安定であり、常に他からの力によつて脅かされ動かされていた。そうして、文學はいよいよ貴族生活の爲の手段化し、學問は獨立した存在となる資格を失つていった。このような社會環境にあって、正當な社會批判が成立しよう筈はなく、従つて文人達が白居易の受容に際して、初期の諷諭詩に對して消極的であり、寧ろその本質を正面から取上げることが避けるように見受けられるのも、當然のことと思われるのである。

この間にあって、獨り紫式部のみが上東門院に對して「新樂府」を講義し、又源氏物語には諷諭詩からの引用が數個所あることも指摘され、當時の男子を顔色なからしめたと說かれている。成程神田氏のいわれるように、清少納言に比べて、紫式部の白居易理解は遙かに深く、その引用の仕方も非常に巧みではあろうが、ただ、男性の世界では寧

ろ觸れることを避けるような詩文が女性にだけは認められ、その上、尊貴の人への進講すらなされたということは、普通では到底考えられないことである。紫式部の見識を問題にする前に、女性一般には諷諭詩がどう扱われていたかを知ることの方が先であろう。その點で筆者は桃裕行氏の説として、新樂府が幼學書として使用されていたと推測された點に注目したのである。⁽⁹⁾ 若しそうとすれば、上東門院への進講も何らの矛盾もなくなり、その場合、男性の文人にとつても、諷諭詩は必ずしも避けるべきものとはならず、一般論或は社會への入門書としての意義があり、現實への適用となれば、ここで改めて別の配慮が加えられたとみるべきであろう。文學が盛大となり、その波に乗って白氏文學も流行するが、背後に政治道德としての儒教倫理を無視しようとする動きがあることは既に述べた。そういう貴族社會の頹廢が、儒教の倫理感に基く社會批評としての諷諭詩を、幼學用として敬遠することはありうることであり——後述のように彼の本質は飽く迄も諷諭詩にあるのだが——白氏自らも晩年に至って、寧ろそういう批判の態度に自省を加えるような口吻を示していることを、當時の文人達はよもや見逃してはいないであろう。

註(1) 「又學問の道は抄出を宗となす。抄出の用は藁草を宗となす。餘正平の方に非ず、未だ停滯の筆を免れず。故に此の間に在りとし在る短札は、總て是れ抄出の藁草なり。」(『本朝文粹』書齋記)

- (2) 神田秀夫「白樂天の影響に關する比較文學的一考察」(『國語と國文學』昭和廿三・一〇・一一月號)
- (3) 金子彦二郎「平安時代文學と白氏文集」(第一冊)のうち第二章。
- (4) 例えば三公になった者が、形式的に辭退の届を出す。それは受理されないことが豫めはつきり分っているながら二度、三度と繰返し提出する。そのまことしやかな理由も一切彼等文人が書くのであり、その存在のあわれさが分る。
- (5) 秋山虔「菅原道眞論の斷章」(『國語と國文學』昭和三一・十月)
- (6) 「奉胄右相府書」(『本朝文粹』)その中で「伏して冀くは其の止足を知り其の榮分を察して……」とある。
- (7) 秋山虔「古代官人の文學思想」(『國語と國文學』昭和三〇・四月)

- (8) 十二條の順序、項目の取上げ方からして、三善家の職掌など、背景をもう少し考究する餘地がありそうである。
 (9) 桃裕行『上代學制の研究』(三九六頁) 尙「榮花物語」に於ける女人の新樂府への態度も注目してよいであろう。

(2)

藤原氏の政治、經濟上の獨占形態がいよいよ明確化するにつれて、中下級貴族の没落はいわば慢性化していった。當時第一級の學者、文人の大部分はこの階層に屬していて、彼等は政治的には全く無力に等しかったが、その反面、この困窮に對應するための新しい努力は、これ以後の文化を質的にかなり違つたものに變えてゆくことになった。

いまここでは、白居易文學の受容を一應ほぼ藤原時代に限定して述べることにするが、階層的にみればその影響は極めて廣範圍に亘り、貴族社會の中でその影響を蒙らない層は皆無であつた。文運隆盛を極めた唐代に於て、一流の文名をはせた詩人、文人の數多い中で、白居易ほどわが國に流行したものは他に求めることはできない。

その原因について、岡田正之博士は、その所説を要約すれば、唐に於に流行したこと、その内容が平易流暢であること、佛教思想を含んでいること、などを挙げられた⁽¹⁰⁾。その後、水野、金子兩氏の説があつたが、近時神田秀夫氏は、これらの諸説を批判的に攝取して、長壽、高位、諸思想の不思議な融合、常識家、大衆的、平易な内容、文學辭典の代用などの諸點を列舉して説明された⁽¹¹⁾。これらはいずれも妥當と思われるが、ただこれまでの諸説は、いわば平面的に現象を網羅して列舉するに止まり、その影響面を階層的見地から考察することに、やや不充分ではなかつたかと思われる。勿論、上、中下流によつて受取り方がすべての點で全然異つてゐるわけではなく、中にはかなり共通している面もあるけれども、前述のように、明らかに生活態度が相違してゐるとなれば、白氏文學に對する重點の置き方に自ずから差異が生ずるのも當然であらう。例えば神田氏は、長恨歌流行の原因を、宮廷生活を背景にして楊貴妃

という美人が畫かれているからであると説明された。上流の貴族にとっては、その日常生活からみて、自分達にも何時かはありうべき物語として、一層興味を湧かせたであろうし、又女官達にすれば、楊貴妃への可能性を夢想しつつ、熱狂することも恐らく無理からぬことであろう。それに引換えて、中下級文人たちにとっては、詩的内容の現實化ということは殆んどあり得べからざることであり、現實問題としては、寧ろ華やかな宮廷生活の雰圍氣そのものに關心が注がれるのが自然ではなからうか。長恨歌の成立地盤などに思いをはせる餘裕のなかったのは無論である。

すべての立場の人に共通な點を見出すことも必要には違いないが、この場合、上、中下流との間には明かな生活上の相違があり、その相違が文化的にも意義がある以上、白居易文學の受容に關してもこの點に焦點を合せ、特に中下級文人たちとの關係を中心にして考察を進めてゆくことにしよう。更に嚴密に言えば、同じ階層の間でも當然個人差は認められるので、この點についても出来る限り具體的に考察したいと思うのである。

先ず順序として、上流に於ける受容のことになるが、文化史的にみて、特に大きく問題にしなければならない點は殆んどない。白居易の作品が彼等の社會的慣習、儀禮の一種として行われる詩作に際して、文選などと共に、文學辭典の役割を果していることはいうまでもない。元來彼等が白氏文集に接した最初の機會は、その家庭に於ける個人教授を通してであるが、そこには、儒教的色彩の濃い大學の教科書には加えられていない老莊などの思想と共に、本來嚴しい實踐を伴う儒教倫理思想には味うことのできない、自然で自由なものに接しようとする意圖があつたのである。⁽¹²⁾

政治的、社會的地位に恵まれ、更に經濟的生活も安定して、生産の勞苦を全く知らずに、専ら消費生活の喜びにひたっている者にとつて、儒教と違つたこれらの文學や思想は、如何ばかり自由であり魅力があるか、想像に難くないであらう。その上、白氏には佛教的和諧の精神が加味されている。少數の例外を除いて、俗世間を棄て去る必要の毛

頭ない彼等にとつて、仙界や極樂世界を自由に空想することはどれ程楽しいことであろう。白居易は己れの生きる道を、彼なりに苦しみつつ求めてきた。然るに彼らはその苦しみは抜き去つて、ただ、それを表現している詩の世界に分け入つて、概念の空轉を弄べば足りたのである。また四季に應じて、その季題を文集の一句から撰び出し、それを中心にして詩會が催され、或は老年に至れば、白氏の提唱にかかる尚齒會が、殆んどそのままの形ちで行われることも屢々であつた。第一級とまではゆかないにしても、白居易の達した地位が決して低くないことも、彼等の優越感に或る種の満足感と親近感とを與えたであろう。その詩風をみても、白俗、或は「流麗安詳」⁽¹³⁾と評されるように、諷諭詩を除いては、彼等の感覺を不快に刺戟したり、緊張を強いるような重苦しいものは殆んどない。「雄渾蒼勁」⁽¹⁴⁾と評され、中國に於ては白氏より遙かに高く評價された杜甫の詩が、彼等の間で愛誦されなかつたのとは正に正反對の理由から、いわば白居易を美的享樂の對象として、長年に養われてきた纖細極まりない感受性をもつて受容したのであり、神田氏が擧げられた盛行の原因も、彼等上流者にはすべて適切であつたといえるのである。

このような、上流の飽くなき生活の享樂に対して、中下級貴族たる文人たちは、既述のように最早沒落に瀕してゐた。白氏の文學に陶醉することはあつても、そこには絶えず、不安や滿たし得ない憧憬があり、上流者のように、單に生活の修飾として受け容れる程の餘裕はなかつた。勿論、當時の一般的傾向に従つて、彼等も文集の中から必要な言葉を拾い上げ、これを摸倣することも屢々であつて、その點からいえば、廣い意味で上流者と同一の生活圈内に在つたのは事實であろうが、然し彼等が主として白氏に求めようとするものは、寧ろもう少し切實な人生的問題に於てであつた。上流人士が白氏にいだいた親近感とはまた別の點から、彼等も亦白氏に近ずいていった。

儒教思想は多くの文人たちにとって、最早その内心の支えとはなり難くなつてゐた。しかし伯夷叔濟や陶潛のよう

に、「高尚の志」⁽¹⁵⁾を當時の社會の中で續けることも困難であつたし、さりとて、俗世を棄てて佛門に入るには尚未練が残つていたし、實際問題として、最早絶對絶命の境地に迫込まれていると見做す人も少なかった。こういう、現實社會には不満ではあるが、何物かに徹しようとするればそれも種々の困難を伴うという、いわば生殺しに近い状態に置かれた彼等にとつて、白氏独自の現實處理の仕方や考え方は、確かに彼等を捉えるものがあつたのである。

成程、白氏は藤原時代の没落に瀕した貴族達程零落もしていないし、生活も確かに一應は安定していた。然し世俗と解脱の間を苦しみつつ彷徨し、必ずしも徹底するまでには至らなかつたが、彼なりのやや安易ではあるが一種の安らぎを得ているのであつて、見榮、逃避、誇り、功名心などを未だ随所に交えつつ、その安らぎに到達するまでの行程を、長詩ばかりでなく、時には片々たる一句にも託して表現し續けたのである。この官人として終始し、似たような苦しみを嘗めつつ一生俗世に交つて生を終つた白氏程、わが文人達にとつて親しみ易い存在があり得ようか。單に親しい友人としてではなく、人生體驗を積んだ先輩として白氏程、彼等文人達によき指標を與えてくれた人はいないに違いない。勿論、中にはその生き方に反撥する者もあつたろう。それに白氏は彼等より遙かに社會的地位は高い。然しその點では、それが必ずしも順調な昇進ではなく、そこには迂餘曲折があつて、その間には苦汁に満ちた生活もあつた。従つて地位の相違はさして問題にならないし、又或る意味では自分達のいわば一種の理想像としてそれに接しようとする傾向もみられるのである。その人生體驗について、賛否はあろうけれども、少なくともその生き方がわが中下級貴族には、何人にもまして大きな影響を與えたのである。藤原期文化の質的變化に與えた、中下級文人達の影響力については既に述べた。その彼等に對して、外形的にはなく、人生の根本問題について與えた白氏の影響は、彼が平安朝全體に與えたものの中で最も深かつたことはいふ迄もないであらう。

以下、これら文人達が、濃淡の差はあるにしても、白氏より受けた影響を『本朝文粹』記載の詩文の中に求め、特に数人の夫々異なる接し方をした人達を選んで、具體的に觸れてみよう。

いま柿村重松氏の『本朝文粹註釋』によつて、本文に載録されている各種の文章中の、言葉の出典を調べてみると、『文選』(一二九四回) がやはり壓倒的に多く、以下『史記』(五二五回)、『後漢書』(三九一回)、『漢書』(三七五回)、『禮記』(三二六回)、『白居易』(二七一回)、『詩經』(二六八回)、『論語』(二六一回) などが比較的使用回数が多いものである。⁽¹⁶⁾ 勿論ただこの回数のみを絶對視するつもりは毛頭ないが、ここに示された數字に關する限り、白居易の詩文がいわゆる文學辭典としてどの程度の役割を果しているのか、少くともそれが果して文選に取つて代る程、その面で活用されていたのか、やや疑念が持たれるのである。

次に白居易について、比較的引用の多い文人は、源順、前中書王、菅原文時、大江朝綱、菅原道眞、大江匡衡、慶滋保胤などである。勿論言葉の引用回数の多少によつて、機械的に白居易との關係の深淺を計ることはできるものではない。例えば「白樂天讚」の作者である都良香や、菅原道眞によつて「元白再生すとも、何を以て焉に加えん」と評された紀長谷雄など、いずれも引用回数は必ずしも多くはない。白居易との結びつきは、このような語句の點と、更に發想上の關聯性をも取り上げなくてはならないが、ここに取上げた『本朝文粹』が、大体九世紀初頭から十一世紀半ば頃までの文人の詩文を載せている中で、前記の数人の文人は、十世紀のごく初頭の菅原道眞がやや時代的に離れている以外は、すべて十世紀末期に活躍した中級文人であり、更に特殊な環境に置かれた前中書王を除けば、他はすべて階層的にもほぼ同程度であり、白居易に於ける思想的側面の受容については、はからずも最も關係深い人に相當するのである。以下、單に引用回数にこだわらずに、思想的關聯性をも考慮に入れて、數人を取上げてみよう。

(イ) 菅原道眞

その詩文が白居易の域にまで達しているとして、朝鮮の國使を驚嘆させたことはよく知られている。本朝文粹に於ても白氏よりの引用は多く十九回を數える。但し、それは全部いわば文學的修飾の言葉であつて、白氏の人生に涉るようなものは見當らない。それはその晩年の生活を除いて、比較的順調の人生コースを辿ったことや、その接する階層の人達との交渉關係をも、考慮に入れて然るべきであらう。そして、そこには人生の歪みや、消極的な側面は表面にはみられず、人生を眞直ぐに進んでいるかのようなのである。従つて、詩體や發想には白氏からの影響を受けつつも、その晩年に於ける隱逸的な色彩は少しもみられず、はつきりと儒教的人生觀が表明されている。「我が感の秋を悲しむ可き有り、我が興の能く水を樂しむ無し⁽¹⁷⁾」といつて、自然に接しても、直ちに智者、仁者に等しからんと願うのである。それはまた天皇を讚美し、大御代を壽ぎ、儒教の立場に立つて、天皇に對して政治的理想を提示することにもなるのである。道眞の時代は、既に現實政治と儒教的政治道德とが矛盾し、次第に儒教そのものが内部的に弱體化してゆくのであるが、道眞に於ては、表面的にはそれが殆んどみられない。これは強大な學閥の最高責任者としては、當然の態度、生き方であつたであらうし、それに彼の時代が九世紀末から十世紀初頭であつたことも、こうした生き方を可能にした。いわば内から崩れようとする官人の政治道德的支えの最終の據點とも見做し得よう。いずれにしても、最も官僚的色彩が濃厚であり、稍もすれば己れの才を恃み、排他、獨善にも陥り易いのである。

若し道眞と白居易の人生と交わる點があるとすれば、それは當然初期の、つまり、諷諭詩時代のものでなくてはならない。「未旦求衣賦⁽¹⁸⁾」などは、そういうものを内に湛えた詩作ともいいうるであらう。

回源 順

周知のように、その出自は決して悪くはないが、不遇の生涯であった。天元三年、七十歳のとき、伊賀、伊勢國守の闕たらんとして「家富めば則ち愁ふ可からず、農桑に就きて餘命を養ふ可し、年少きも亦歎く可からず、飢寒を忍んで後榮を期す可し、年老い家貧にして、愁深く歎切なるに至りては宿世の罪報を知らず、泣きて猶ほ明時の哀憐を仰ぐのみ⁽¹⁹⁾」と哀訴したが遂にその望みは達せられなかった。それは死の三年前のことである。

梨壺の五人に撰ばれたり、或は勤子内親王のために『和名類聚鈔』の編纂などして、文學上多くの功績を擧げてはいるが、死に至るまで生活に追われて、それをどのように内的に解決していたのかは、切實な問題である。生涯の最後まで地方官の職を望みつゝ、それが容易に容れられなかったところから、彼が權門に阿ることを潔しとしなかったことがわかる。老年に至って困窮に追いやられた文人達が、ややもすれば安易の途をとろうとするのに對し、堅く己れを持するところが見られ、「學を好んで益無き者有り(中略)一生貧にして道を樂しむ、徒に原憲の前蹤を繼ぐ⁽²⁰⁾」というところに最後の支えをもっていたのであろうか。

一時淳和院に於て、十餘人の文人が集ったことがあった。源順はその有様を一文にまとめているが、それには文選や文集からの言葉が自由に驅使されている。そしてその最後に「名は遊覧なりと雖も實は文章を闔するなり⁽²¹⁾」と結んでいるが、心中に抗し難い不敵な魂を蔵していたことはこれによっても分るであろう。その他、『扶桑集』にみえる「五嘆吟序」に於ても弱々しい小不満らしいものは見受けられないのである。

四十四歳の時、當時既に出家していた橘在列が新たに詩集を出すに當つて、そのために序文を書いている。それは世に容れられずに出家した在列に對する、同情と同感に溢れたものであるが、その中で源順は在列に觸れつつ、實はその背後に於て白居易の生き方を描き、或る程度それに同調を示しているかのようなのである。「四魔を降伏し、其れ猶

は降らざる者は獨り詩魔のみ⁽²²⁾」といって、間接的に白居易の詩魂にふれ、更に「義の爲に作り、法の爲に作り、方便智の爲に作り、解脱性の爲に作り、詩の爲に作らず⁽²³⁾」といって、花鳥風月の爲の詩を白居易の晩年にならって否定しつつ、實は眞の意味で、詩文の純粹なるものを讃美しようとするのである。このように、學者としての矜持と詩人としての純粹さが、彼の生涯を通して生の支えとなったとみてよいであろう。

然し彼は在列のように出家したり、或は閑居して隱逸の境地に至ってはいない。「貞上人は我が師なり⁽²⁴⁾」といい、法華經のことにも觸れてはいるが、遂に信仰の人にはなり得なかった。ただ最後に「夏日閑居」に於て、松、竹、苔に題しつつ、嵇康、阮籍、白居易などの生涯に秘かにあこがれていたかに見えるのである。

最後にもう一つつけ加えておくべきは、彼の詩中には現實社會の批判らしい言辭が殆んど見當らないということである。

ハ 菅原文時

道眞の孫に當り、文章博士となつて菅原の家學を繼いでいるが、儒家の社會的地位はいよいよ低く、八十三歳で死去する年わずかに三位を授けられ、世に菅三品と呼ばれた。流石に家柄は争えず、考え方、感じ方の根柢には未だ儒教的態度がみられ、「織月賦⁽²⁵⁾」などという文學的作品の中にも、「徳や孤ならず」とか「空しく嬋娟に迷ふ」などという言葉が使用されているのである。

その詩文には個人的不滿も隨所に散見するのであるが、更に當時次第に時事評論、社會批判が影を潜めつつあったにも拘らず、天曆八年村上天皇の綸旨に應じて「封事三箇條⁽²⁶⁾」を書いて提出している。それは政策的にみれば、勿論儒教の固定概念を一步も超出してはいないけれども、社會批評としてみると、時弊を率直に指摘している點注目に

値いする。ただ、當時最早こういういわば憂國の文章がそのまま受け容れられる世ではなく、上流に媚を呈することもない爲か、その後顧みられず、下位に沈淪する運命となった。

老年になって、不安が色濃くなつてくると、權門の下流に入るか、或は佛門に入る迄にはいかなくとも、佛教的思想や隱逸に近づくのが當時普通にとられる内心の遍歴過程であるけれども、文時はそれらをいずれもはつきりと拒否している。『十訓抄』で僧侶が臨終にいかなかったという逸話⁽²⁷⁾も、その生き方を暗示しているかに見えるのである。そうして最も興味あることは、暗に自らを白居易の生き方に對立するものと見做しているということである。

安和二年三月十三日——その廿六日にはいわゆる安和ノ變が起る——、亞相藤原在衡の山庄で白居易のそれに眞似て、文人達が相寄つて尚齒會が催された。在衡は當時七十八歳、文時は七十一歳であつたが、その會詩の中で彼は「嵇中散の竹林、幽なるは則ち幽なり、嫌らくは殆んど素論の士に非ざるを、末だ此の會の首上皆霜に、膽の中共に露はれ、進んでは王道を樵路に談じ、退きては風情を雲心に混じ、一觴一詠、性を其の間に養ふには若かず⁽²⁸⁾」といつて、老莊風——この中には當然白居易も含まれている——の玄談を寧ろ否定して、儒教に立つ素論を重んじ、閑居よりも國事を談ずるをよしとしている態度がみられるのである。

これよりも更に明瞭に——その名こそ出さないが——白居易の思想、態度に挑戦していると思われるものが「老閑行」である。これまでの白居易研究は、その受容面のみに重點が置かれてきたが、それと共に、反撥する者に對しても注意を向けなくてはならないであろう。これは貞元二年秋、八十歳のものであり、「聊か思ふ所あり、偷に書き出し畢る」とあるように、生涯の感慨と、生に對する最終的態度を明にしたものとして、極めて重要なものと思うのである。先ずはじめに「生徒走りて室に入らず、故人厭きて門に至らず」とあるが、官人に國家の保證はなく、従つ

て一流の學者も貴族の子弟を個人的に教授する内職風の仕事が、生活の支えとして極めて重要であつた。然しそれとても、權門と結びつきのある人が喜ばれるのは當然であつて、文時はそのような弟子をも次第に失つてゆくのである。従つて「罇に酒無くして自然に醒めたり」ともなり、少し離れた個所にある「繪を習ひ歌を學びて悶襟を散ずること能はず」などと共に、おのずから白居易の生活が意識されてくるのである。また「世路の喧囂は去ると雖も猶ほ聴く」とある一句などは恐るべき辛辣な言葉であつて、一方に於ては、隱逸の生活に對する不信の念の表明であり、また自分がそうなり得ないことを率直に敍べているとともに、文人の多くが高尚な言葉を弄しつつも、寧ろ物ほしげな態度をとつて、權門に近づくことを喜んでゐる偽善的態度に對して、いささかも呵責しないのである。次で「園に灌ぎ澱に拵けて作業を營むこと能はず」と述べて、經濟的不安を率直に告げ、まさにそれなるが故に「其れ冠を掛け棲遲して影を洞壑に息むるを奈せん、其れ衣を染めて精勤し法を山林に求むるを奈せん」と告白するのである。これは官を去つて優游隱遁したり、或は僧となつて山林に法を求めることはまだ安易の道であり、自分としては當面如何程低い官でも恵まれれば望むところで、そういう生活面を一切無視して、徒に出家することなどは一片の夢に過ぎないのでといつてゐるのである。世を遁れることについて、これ程一切の隠しだてをせず、すべてを餘すことなく吐露した言葉があるであらうか。またこれ程痛切な言葉が文人によつて嘗て書かれたであらうか。

「老閑行」のこれらの言葉を白居易のものと比較してみると、そこに述べられている事物が單に日常生活のありのままの描寫ではなく、白居易などの生活と意識的に對照して書かれてゐることがわかる。先ず酒と琴とは白居易にとつて、切ることのできない程深いつながりを持つてゐることは、今更贅言を要しないし、生活の基礎に關しても白居易は、「老來生計」に於ける「陶令田有りて唯黍を種⁽³⁰⁾う」や、或は「間居貧活計」と題するものに於てすら尚、「簡瓢

陋巷深く、家に稱^{かな}へて戸牖を開き、力を量つて園林を置く⁽³¹⁾と生活的餘裕を残しているのであつて、兩者生計の差が明示されている。「世路喧囂⁽³²⁾」はわが國は勿論、中國の文人からも恐らくは餘り耳にしない言葉であるが、これに對して白居易の文中には「心靜かに喧處の寂を妨ぐる無し」といふような言葉が隨所に散見しているのである。

元來明經道は中國の政治や倫理の講學を本筋にしていたが、次第に單なる政治技術の修得機關に墮し、紀傳道に中心は移つた。文時は寧ろ本來の明經道の傳統を守つて、儒、佛、文學の曖昧な融合を拒否したのであり、社會的地位や經濟生活の相違と相俟つて、白居易の融通無礙の常識哲學をも安易に受容れられなかつたものと思われる。つまり隱逸、閑居のための基本的條件は彼によりすべて否定されたことになるわけである。

然し、文時ほどはつきりと己れの態度を表明しなかつたにしても、閑居を言葉通りに行いうる者は、當時としては極めて稀のことであり、畢竟白居易は多くのわが文人にとって、一種の理想像であつたともいえるであらう。

それにしても、「老閑行」の最後の句が「君見ずや北芒の暮の雨に纍纍たる青冢の色を、又見ずや東郊の秋の風に歴歷たる白楊の聲を」と結ばれているのは、いかにも象徴的ではないか。

(二) 前中書王 (兼明親王)

醍醐天皇の皇子で、晩年には左大臣までなっているが、時の關白藤原兼通の恣意な壓力により、貞元二年、六十四歳の時退けられ、嵯峨の小倉に閑居して世を終っている。

然しこの解任も決して突然の事件ではなく、王が相當の人物であつただけに、早くから藤原氏にとっては好ましからざる人物とされていたらしく、四十五歳の作中にも「朝廷我を抛つて、顧みず⁽³³⁾」とあるし、これはやや晩年のものになるが、將來の不安について子弟を戒め「今弟子の子孫を誠むるや、桑門の侶に如かず⁽³⁴⁾」と世間の頼むに足らざる

ことを言明しているし、これは白居易の謫居中のものにも非常に近いのがあるが、その坐右銘の最後に「缶を撃ちて
謫はずんば、何を以て吾が身を慰めん」⁽³⁵⁾などに、その不幸が暗示されているのである。然しながら皇子という特殊
の出自が、ある程度藤原氏をも遠慮させ、少くとも経済的には中下級文人貴族達とは比較にならなかった。このよう
な、皇子としての自意識と、不幸ではあるが或る程度の保證があるという、一種中途半端な環境が王を白居易に接近
させるようになったのは寧ろ自然であろう。他の多くの文人達のように、白居易は決して手の届かないところにある
理想像ではなく、勿論兩者の諸條件はかなり相違してはいるが、人生行路の上からみても一面相通じる點があつた。
その詩文中には白居易の言葉が屢々使用されるが、それは文學的修飾のための借用ではなく、その殆んどが人生に於
ける苦悩の共通性に基くものばかりなのである。

ただここで氣づくことは、先の解任事件が王の人生にとって重大な轉期になっているということである。そして、
それ以後白居易との内面的交りが一層深化してゆくのである。王は四十六歳、中納言の時「池亭記」を書いている。
これは白居易の「池上篇」を原型にして、他にも白氏の言葉を隨所に交えて作られたことは既に定説となつてはいる
が、外形的類似にとられずに、兩者を比較すれば、そこにある精神は全く違ったものである。例えば、その中に、
「余少くして書籍を携へ、略兼濟獨善の義を見たり」とあるが、白氏では——尤もこれは池上篇のではないが——「兼
濟獨善は得て并せ難し」⁽³⁶⁾とあつて、若年の頃の大志が意の如くならざることを寧ろ悲嘆する言葉であり、これが次第
に政治的理想としての兼濟を斷念して、自己充實としての獨善に向わしめたのであつて、「池上篇」の底を流れる精
神もそこにあつたのである。「優なる哉優なる哉、吾將に其間に終老せんとす」と結ぶ所以もそこにある。ところが
王にあつては、兼濟と獨善とが單に並列されていて、兩者の關係には少しも觸れられていない。勿論王に於ても體驗

的には兩者は決して兩立する筈がなく、そういう點では白居易と同じ苦しみを味う立場にあった。それにも拘らず、表面的には兼濟の難しさに觸れられずに、自得しているかのような言葉が羅列されているのは、實は表面とは全く逆に、兼濟が未だ斷念されていないことを示すとみてよいであろう。その意味からすれば閑居が概念的に理解されていたともいえるのである。こういう態度はその後貞元元年の「供養自筆法華經願文」を経て、解任直後の「菟裘賦」まで續いている。この作は王としては代表的なものとされ、藤原氏に對してこれ程はつきりと批判的言辭を以て報いたものは他にないといわれる。然しよく讀めば、これは眞の批判の文字というよりは、寧ろ個人的憤懣の爆發に過ぎない。その道德的勇氣といつても、皇胤ということをも考慮に入れれば、この程度のことは決して表明し難いという程のことはなく、裏を返せば、寧ろ一種の特權意識の表われといつても過言ではないであろう。従つて、そこに使用されている多くの思想的言葉にしても、體驗的充實は感ぜられず、知解に過ぎないものの羅列が目立つのである。

然るに解任後の作である「遠久良養生方」や「憶龜山二首」⁽³⁷⁾になると、これまでの一種の優越感や理窟、更に概念的言辭は次第に消え、簡潔でしかも具體的になると共に、白居易への傾倒がより明白に表われる。しかも白居易の言葉の單なる借用ではなく、それを内から體驗的に満たしてゆくのであり、ある意味ではここに至つて、はじめて眞に白居易が内面的に受容されたといつてもよいと思うのである。

このように王の白居易受容史には大きな變化があつた。これは王としては個人的な事件に過ぎないかも知れないが平安時代に於ける白居易受容という觀點からこれを見る時、白居易が如何にみられ、内面の世界に於てどう扱われるかの、一つの典型がここに示されているとみる事が出来るのである。

その詩文集『江東部集』に「夫れ江家の江家たるは、白樂天の恩なり」（巻中）というのがある。その理由は、大江家が代々天皇に對して「文集の侍讀」になっていて、家の名譽であり、ひいてはそれが大江家繁盛の原因でもあるというのであつて、そこに匡衡の對白居易感が端的に示されているのである。本朝文粹に於ても、白氏からの言葉はかなり多くみられるが、殆んど總てが文學の修飾風のもので、人生的なものは皆無である。また、時として思想詩風のもの無くもないが、全く概念的言葉の羅列に過ぎない上に、その詩の内容と行動とも矛盾していることが多い。それに、これは他人の爲の文章に見られるのであるが、佛門に入るよりは官位をとさえ明言し兼ねないのである。

これは平安朝に生きる多くの文人にとっては、一種悲しい宿命ともいえないこともないが、それにしても、匡衡程の閱歷を持ちながら、道長など當時の最高の權門に近ずいて、平然と阿諛する態度を恥しげもなく示し、その權力を極度に利用して、これ程までに立身出世に狂奔した文人は寧ろ稀有のことであろう。長保二年、四十八歳の時、期待していた國司の選に漏れたときなど、「心は死灰の若し⁽³⁸⁾」といい、更に「仲居曰く、學ぶときは祿其の中に在りと、此の言に欺かれ、少年のとき誤りて文學を好む、是れ一の夢に一生を誤るのは比^{たひ}なり⁽³⁹⁾」とまで極言して憚らなかつた爲、流石溫厚の藤原行成も啞然として、これを窘めざるを得なかつた程である。⁽⁴⁰⁾またその願文や作文がいかに權門に關係するものが多いかも、本朝文粹が明示するところであつて、特に道長の願文として書かれものが餘りにも俗に過ぎたため、逆に道長から書き替へを求められたのは有名なことである。⁽⁴¹⁾

このように、白居易と内面的に殆んど何の關係もない文人が上流貴族社會に出入し、その指導によつて、それなりに理解された白居易文學が受容されたとすれば、その事だけによつても、上流人士の多くが白居易に何を求めていたか、明になるであらう。そうしてこの意味での受容は、白居易文學としては最も表面的なものであつたことはいふを

またないのである。いま、藤岡作太郎博士がつとに匡衡について「蕪雜粗厲、疵瑕滿幅、俗臭紛々として、品位の見るべき處なし」(『國文學全史』)という斷案を下されたことが思い出されるのである。

以上の數人は種々の意味からみて、白居易との關聯が最も深い人である。(慶滋保胤については次項で別に述べる)然し本朝文粹にはこの外にも、その影響が決して淺くない人が未だ多く残っている。例えば、藤原篤茂が竹に託して、秘かに白居易の閑居を慕い、橘正通が白氏の酒・琴・詩、三友の閑居を遙かに望むなど、枚舉に遑がない。⁽⁴²⁾そしてこれらの人達は夫々違った生き方をしてはいるが、攝關政治下に於ける官僚として生きている點で、確に共通の地盤の上に立ち、既に擧げた人達のもつ各々の特徴を、少しづつ分ち合つて、この時代に通じる官人像を成立たせていたといえるであらう。

本朝文粹の使用語例を更に白居易以外にまで擴げると、杜甫、韓愈、陶潛、李白などからの影響は、中國に於けるその盛名にも拘らず、意外に少ないことが知れるのであつて、壯大なもの、理性的なもの、高尚なものなどは、平安時代の一種衰弱した官人たちには近より難い存在であつたとみるべきであらう。それに引かえて、大學の教科書以外では、「楚辭」「世說」「莊子」をはじめ、「淮南子」「白虎通」「抱朴子」「駱賓王」「列仙傳」などの仙道關係書などがかなり多く、「法華經」「華嚴經」が文學作品中に相當數取入れられているのもこの時代の特徴の一つであらう。

これら數多くの書物から、雑多な言葉が取出されているが、その各々の言葉の背後にある思想體系そのものの理解や、整理などは殆んどみられず、ただ、在るものが雜然と取り入れられている形迹が充分にうかがえるのである。儒教思想が生きた思想として彼等を支え得なくなつたとき、——儒教そのものの場合にしても眞にそれが支えとなり得たかということには多くの疑念が存するが——それに代るべきものを體系的に批判しつつ受け容れるだけの充分の思

想的弾力性のないままに、近ずき易いものを雜然と手當り次第に取り入れたのであろうが、それらの間に強いて共通點をみようとすれば、反社會的なものか、生命の保全や享樂的な思想を含むものであることは、まことに興味あることといわねばなるまい。

このような官人の内面生活を眺めるとき、以上のような諸雜書中にみられるすべての要素を適度に具備し、しかもそれらが一種不可思議な融合を示している白氏文集が、何よりも先に愛讀されぬ筈がないではないか。然も官人としては相應の地位にまで昇進し、最後には閑居にいて一應悠悠たる餘裕を示し、それを親しみ易い、然もかなり説得力ある言葉によって表現したとすれば、その白居易の根本態度を徹底的に解剖、批判して、これを乗越えうる文人が、果してわが平安時代にどれ程存在したであろうか。

註 (10) 岡田正之『日本漢文學史』(増訂版)(一六九頁)

(11) 神田秀夫、前掲に同じ

(12) 桃裕行、前掲書に同じ(三八九頁)

(13) (14) 共に『唐宋詩醇』の二氏に對する評語。

(15) 大江以言「七言晚秋於天台山圓明房、目前閑談」(『本朝文粹』卷十の中

五柳先生について「彼皆偏へに高尚の志を食ひ…」とある。

(16) このうちには「補訂」は數に入れていない。又神田喜一郎氏も指摘されるように(『日本文學研究必携』)、更に増補の必要があるようである。ただ機械的ではなく、概數を把握するための數値である。

(17) 「秋湖賦」(『本朝文粹』卷一) (18) 『本

朝文粹』(卷一)

(19) (20) 「請依：伊賀伊勢等國守闕狀」(『同』卷六)

(21) 「晚秋遊淳和院同賦」(『同』卷八)

(22) (23) 「沙門敬公集序」(『同』卷八)

(24) 「夏日與王才子過貞上人禪房」(『同』卷八)

(25) 『本

朝文粹』(卷一)

(26) 『同』(卷二)

(27) 「菅三位の終焉の刻に近付にけるに、善知識の上人よびにやりたりければ、身は參らずとも同事也、今はかくと思召ん時、詩を一首作給へといへり」(『十訓抄』可庶幾才能事)は文時の對佛教感の逸話化されたものではなからうか。

(28) 「暮春藤亞相山庄尚齒會詩序」(『本朝文粹』卷九)

(29) 『同』(卷十二)

(30) 『續國譯漢文大成』(卷四) 三五八頁

(31) 『同』(卷四) 六九九頁

(32) 『同』

(33) 「發願文」(『本朝文粹』卷十三)

(34) 「供養自筆法華經願文」(『同』卷十三)

(35) 『同』(卷十二) (36) 「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌」(『續國譯漢文大成』卷三、二六五頁)
(37) 「憶龜山二首」は神田喜一郎氏も指摘されるように、白居易「憶江南詞二首」が原型になっているが、詩型そのものは同型である。いまそれを比較してみれば、

(白)

(前)

風景舊曾諳

龜山久往還

日出江花紅勝火

南溪夜雨花開後

春來江水綠如藍

西嶺秋風葉落間

能不憶江南

豈不憶龜山

- (38) 「返納貞觀政要十卷」(『本朝文粹』卷七) (40) 「同返事」(『同』同) (41) 『御堂關白記』寛弘八年三月廿七日條
(42) 「冬夜守庚申同賦修竹冬青應教」(『同』卷十二) (43) 「初冬同賦紅葉高窓雨」(『同』卷十)